

EPA 看護師候補は、今年第 10 陣が来日していますが、国家試験の合格率は低く、多くの看護師が帰国を余儀なくされています。私は、不合格で帰国したインドネシア人で再受験を希望する看護師への学習支援を行なってきましたが、インドネシアで国家試験合格レベルまで引き上げることは、とても難しいと感じています。

この問題については、日本語習得レベルに注目した議論が多く行なわれていますが、日本の看護に必要な看護実践能力にはあまり注目されていません。

今回、看護の考え方の違いに注目するために、試験問題で私たちの支援者が全員不正解となった問題について、分析を行ないました。

試験の前には、インドネシア人の看護師があまり重要だととらえていないとわかっている点については、指導済みです。患者の意思を尊重する、自立を促し本人の力を発揮させる重要性などです。

誤答の要因について、代表的な問題について具体的に報告します。日本人学生は 70%以上正解の問題です。

足浴の湯の温度についての問題ですが、インドネシアでは足浴ケアはほとんどしないこと、技術演習などもなく、心地よいと感じる温度にも差があります。

継続看護で適切なものを選ぶ問題ですが、看護師の仕事はほとんどが病院内ですし、ホームケアはあるものの、病院との連携はありません。インドネシア人看護師にはイメージがしにくい概念です。

小学生に偏食を自覚させる方法を聞いた問題ですが、食事指導というものが看護師の役割としては、そもそも一般的ではないこと、そして指導というと、一方向で教えることが普通です。

また補助用具、福祉用具を選定するという問題も多く出ますが、インドネシアでは残された機能を使おうという考えがあまりなく、歩くのが困難なら車いす、不自由なら家族が介助するというのが普通です。

以上より、日本で看護師が大事にしている考え方や、生活の違い、疾病や社会構造のちがいを理解したうえで、新しい知識を獲得してもらう学習が求められると考えます。